



くまがい市議「聞こえのバリアフリー」を質す

後援会で「秋のつどい」を楽しむ

後援会「秋のつどい」開催 “寿司とゲームと年金問題”

9月29日(日)、今年で4回目となる後援会主催の「秋のつどい」が、はまなす会館で開催され25名の後援会員が参加しました。

冒頭、後援会を代表して熊谷泰昌さんが「今年は、一斉地方選挙と参議院選挙がありました。みなさんの奮闘で、すばらしい選挙結果を残し、夕張の後援会は本当に頑張りました。ありがとうございました。「市民と野党の共闘」の先頭に立つ日本共産党は、いま野党連立政権をめざし、頑張っています。総選挙に向け、仲間をふやし、共産党をもっと大きくする必要があります。今日は、カルタ遊びと昼食会をみんなでお楽しみ、次の衆議院総選挙に向けて英気を養いましょう」と挨拶しました。

その後、3組に分かれて「イロハかるた」を童心に返って楽しみました。参加者からは、「もう1回やりたいね」との声も上がりました。

用意された「寿司弁当」を参加者みんなで食べながら、和やかに昔話をしながら、味覚の秋を楽しみました。



「マクロ経済スライドをやめて、減らない年金を」と話しながら、小池書記局長の「国会での年金質問」、「野党共闘へのメッセージ」「だから私は共産党(比例選挙へのメッセージ)」などのユーチューブで流されている動画(インターネット上の動画)を次々と紹介し、「現在の日本の報道の自由度は世界で72番目、大きな報道統制が敷かれています。一般の新聞やテレビでは、本当のことがわかりません。とても民主主義国家とは言えない状況です。子どもさんやお孫さんにこういった動画を見るよう是非伝えて。また、お知り合いに「しんぶん赤旗」をぜひ、すすめてください」と話していました。

最後に、T&Y コンビのギター伴奏で『夕張わがふるさと』と『故郷』の2曲をみなさんで合唱して、集会は終了。参加者は、後援会が用意した「新じゃがいも」のプレゼントを手に、帰りの途につきました。



で、10人に1人が難聴者といわれるが、

【質問】



問の後半部分の概要をお知らせします。

9月10日、20日で開催された、第3回定例市議会において、くまがい桂子市議の質

「聞こえのバリアフリー」へ助成を
「災害時の対応や生活を守る権利」にも注目!
補聴器が非常に高額なため、公的補助のある諸外国と比べて普及率が非常に低く、日本では必要な人の10%しか所有していないといわれる。また、持っている補聴器外来での調整も受けておらず、使用して

【答弁】

聴覚検査は専門の機器や技術者が必要



「聞こえのバリアフリー」へ助成を
「災害時の対応や生活を守る権利」にも注目!
「聞こえのバリアフリー」へ助成を
「災害時の対応や生活を守る権利」にも注目!

【意見】



2019年北海道母親大会参加(報告) 9月16日札幌市民ホール10名参加

午前は、数ある分科会から「笑いヨガ」と「ドキュメンタリー映画・最後の一滴まで」に分かれて学習しました。

流行りの「笑いヨガ」は、インストラクターのリードで、身も心もリラックス出来たといえます。

「ドキュメンタリー映画・最後の一滴まで」は、水道民営化をめぐる世界や日本の動きについて、北海学園大学教授の本田宏さんの解説の後上映されました。私たちが生きていくうえで必須の「水」について、2000年以降、世界各地で水道の再公営化が進んでいます。料金の値上がり等で一度は民営化したものの、水道を公共の手に取り戻す動きは、民主主義や自治体を守るたかやとなりヨーロッパに広がっているという内容でした。

午後は活動交流の後記念講演で講師はTVジャーナリスト・早稲田大学大学院教授 金平茂紀さん。

「日本のテレビ報道の現場で今、何が起きているのか」と題して講演されました。

「ジャーナリストの仕事は、市民の『知る権利』に奉仕することが最も重大な基盤であり、市民も少なからずマスメディアの仕事ぶりに信頼を置いていた時代がありました。けれども今はどうでしょう。洪水のように押し寄せる情報は真実を伝えてくれるでしょうか。自分たちが健全な民主主義を育んでいくのに必要な情報がマスメディアによって与えられていないと思いませんか。」 私たちの情報の受け止め方に警鐘を投げかけられました。最後に「思考停止にならないで」と、結ばれました。



くずさんの 夕張歴史散歩 (121)

明治維新 35 / 朝鮮植民地支配 ⑬

日清戦争がもたらしたもの

さて元の路に戻ろう。日清戦争は、中国の列強による帝国主義的領土の再分割と主権の侵害を広げ、強める結果となりました。列強は日本の中国進出を抑え、その上で中国領土の分割・略奪を行うのです。

韓国皇帝 自主をめざす

朝鮮では国名を大韓国とし、韓国政府はロシアからの軍事顧問も廃止し、財政的にも自主的な動きを見せます。外交面でも「局外中立」を宣言し、日露間の雲行きが危うくなるや1903年(明治36年)11月と、翌年(明治37年)1月の二度にわたって「戦時局外中立」声明をだしました。

明治政府・軍部これを無視

列強諸国は、韓国政府のこの局外中立を受け入れる動きを見せません。しかし日本政府・軍部は、これを一切無視します。日露の戦争をすすめる上で、韓国内での軍事作戦や軍事行動から欠かせないものだったので。そのため韓国政府の中立は、絶対に阻止しなければならなかったのです。

「臥薪嘗胆」は、中国の側

三国干渉によって日本は、中国侵略の最大の足場とした遼東半島をロシアに奪われたとして(自らの野望を横に置いて、その結果としての果実を横取りされたとして)、日本国民に「臥薪嘗胆」「ロシア憎し」をあおり、国民生活を圧迫させながら軍備拡張を急ぎます。

こうしてロシアの朝鮮・中国進出と日本の植民地支配の衝突として「日露戦争」が起こされたのです。

臥薪嘗胆＝「薪の上に寝て、熊の肝を舐める」苦勞・辛いことを耐え忍ぶの意



畠山 和也「かけある記」
前衆議院議

病院減らすな、軍事費減らせ

「新しい病室では、外を見ることができないんです」。国立八雲病院で労組のみなさんと懇談した際の、出てきた言葉に耳を疑いました。よくよく聞いて合点がきました。

筋ジス患者と重度心身障害児(者)を受け入れている同病院は、札幌と函館へ来年、機能移転する計画があります。今の病室は床から天井まで届く窓ガラスがあるのに「新しい病室のモデルルームを見たら、高いところに窓がある。これでは寝てる患者が外を見られないんです」との話なのです。

患者や医師・看護師などの意見も反映させながら、過ぎしやすい環境をつくってきた歴史を知りました。この病院の良さに触れて家も買い、八雲町に骨をうずめる気持ちでいた職員もいます。長時間の移設に患者が心身とも耐えられるか、という切迫した問題もあります。このような懸念を伝えても、厚労省や国立病院機構から明確な返答がないといえます。

それどころか厚労省は北海道54(全国424)の公立・公的病院の再編統合を、一年以内に結論を出すよう迫っています。そのなかには移設先となる国立函館病院もありました。いったい患者や家族、職員はどこへ行けというのか。広大な北海道の町から病院をなくすことに心が痛まないのか!

「ここに住んでいたいという患者もいるのです」と懇談の場でも出されました。減らすなら病院よりも軍事費です。米国からの戦闘機爆買いなんて許されない。命を守るためにこそ税金を使う政治へ!